

茨城いのちの電話

つくば
029-855-1000
相談電話

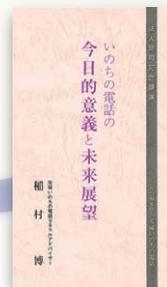
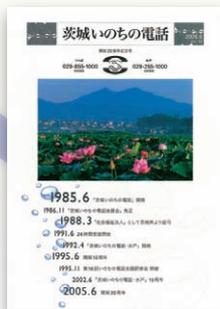


水戸
029-350-1000
相談電話

第88号 2015年 6月



30th
30年のあゆみ
~ありがとうそして未来へ~
Anniversary



挨拶 幡谷 浩史	2	これからの30年/永原伸彦	8~9
ご祝辞 橋本 昌	3	後援会	10~11
ご祝辞 齋藤友紀雄	4~5	新垣 勉チャリティコンサート/ 29期生認定式/当期受信件数	12
30年の歩み	6~7		

ご挨拶

理事長 幡 谷 浩 史



「茨城いのちの電話」は皆様に支え続けていただいて、はや30年となりました。「光陰矢の如し」を実感すると同時に、当会の運営に対し多くのご支援、ご協力をいただき深く感謝申し上げます。

社会福祉法人として設立され、初代大須賀発蔵理事長の下、1985年つくば市に創立されること30年。筑波大学稲村博先生等のご薫陶を受け、又、賛同参加された企業の先輩諸氏の御苦勞は計り知れず、特に資金調達（基本財産）について難航されたと仄聞しており、改めて深く感謝と敬意を表します。

30年を顧みますと、24時間365日、一日も休む事無く受信し電話相談の数は累計835,860件に及んでおります。集計によると、5年前までは自死（自殺）3万人超えが14年間続き、世界有数の自死大国と云われてきました。世界自殺予防デー（9月10日）に因み、我が国でも9月10日に始まる1週間を「自殺予防週間」と設定し、「自殺対策基本法」も制定され、従来12月初旬の1週間のみの実施であった「自殺予防いのちの電話」を、その後、毎月10日に実施するようになりました。3月の「茨城県自殺防止月間」では、茨城いのちの絆キャンペーンにも参加し、各種関係団体と連携しながら活動を続けてきました。それらの総合力の結果、全国集計でここ直近の5年では、連続して3万人を大きく割り込み減少を続け、今日に至っております。

近況雑感としては、限界集落、買物難民、空き家問題等により少子高齢時代を実感させられる昨今、日本創生会議なる団体から各自治体へ「20年後には貴自治体は消滅します」と名指しされ、気づけばシルバー民主主義が闊歩する始末。戦後70年、敗戦から復興へ懸命な努力を重ね、汗と涙で突き進み、エコノミックアニマルと言われながらも頑張ってきました。しかし、失われた15～20年とされる長期デフレもあり、団塊の世代も今や立派な前期高齢者の仲間入りです。周りを見れば子供の遊ぶ声も聞こえてこず、寂しい限りです。各地域で子育ての為、待機児童の施設を開園しようとする、幼児の嬌声が騒がしいと騒音問題だとして開園阻止に奔走する有様。日本は大変な民族になりつつあり、余りにも自己中心主義で目に余る行為が横行しているように感じます。最近では、乳児2人を道連れに母子心中した事件の記事を目にしました。心痛む事件を目にするたび、少しでも力になれると信じて、我々は組織をあげて取り組んでいかねばならないと痛感しております。

おわりに当法人は、ご存じの通りボランティア団体として、匿名を旨とし電話相談活動に励んでおり、持続のためにも今後も基本ルールを厳守していく所存です。今後とも皆様からのご支援・ご協力をお願いいたします。

開局30周年によせて

茨城県知事 橋 本 昌



このたび、「茨城いのちの電話」が開局30周年を迎えられますことを、心からお慶び申し上げます。

茨城いのちの電話におかれましては、昭和60年の開局以来、30年もの長きにわたり、本県における電話相談の中心として、悩みや不安を抱える多くの方々を支えてこられました。幡谷浩史理事長をはじめとする関係者の皆様、とりわけ24時間体制で相談者からの電話を受けられている数多くのボランティア相談員の皆様方の日頃のご尽力に対し、心から感謝申し上げますとともに、深く敬意を表する次第です。

また、平成23年の東日本大震災に際しましては、発災後から約2年間にわたり、被害の大きかった岩手県、宮城県、福島県、茨城県の住民の悩みに応じる「震災ダイヤル」に参加し、県域を越えて、深刻な状況に身を置き、生きる気力を失いかけている多くの被災者の方々の心に寄り添い、支えとなってこられましたことに対し、重ねて感謝を申し上げます。

さて、警察庁の統計によりますと、平成26年の自殺者数は、全国で25,427人、本県では570人と、全国・本県ともに5か年連続の減少となりました。しかしながら、依然として高い水準で推移していることから、自殺防止対策の一層の推進を図っていく必要があります。

このような中、「茨城いのちの電話」におかれましては、平成13年度から厚生労働省の自殺予防への取り組みの一環であるフリーダイヤルによる「自殺予防いのちの電話」に参加されるなど、相談活動を充実させ、孤独や不安に苦しむ人々のよき隣人として、着実にその活動を社会に根づかせており、その役割はますます大きなものとなっております。

「茨城いのちの電話」の関係者の皆様方におかれましては、今後とも、本県の地域福祉の一翼を担い、悩みや不安を抱える方との電話相談を通じまして、県民誰もが安全、安心、快適に暮らせる地域づくりのため、より一層のご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、関係者の皆様方のますますのご健勝とご活躍をお祈りいたしまして、お祝いの言葉といたします。



茨城いのちの電話30周年を祝して

——二人の精神科医を思い起こして



齋藤 友紀雄

青少年健康センター会長
日本自殺予防学会理事長

自殺予防を志し、日本ではじめて「自殺予防行政研究会」と称する会ができたのは1970年であった。当時目黒保健所長であった故増田陸郎氏の呼びかけで、初めは行政職にある医師など専門家が中心となって結成された。

その後、当時たまたま自殺予防を目的に、電話相談「いのちの電話」の設置を準備していた市民グループと連携することになった。いのちの電話は、最初東京で1971年に創設されたが、わずか1年後に「電話医療相談」を開設、さらに73年には「精神科面接室」を設置した。

1974年春、この面接室で、私が初めて出会ったのが稲村博氏と平山正実氏であった。稲村氏はすでに1996年に世を去り、平山氏についても2013年末に亡くなり、2014年初めに聖路加国際病院チャペルでお別れの会が持たれたが、今や当時の経緯を知る者も少なくなってしまった。「自殺予防行政研究会」はその後「日本自殺予防学会」となり、いのちの電話も全国的な組織に成長した。

さて上述のように、当時すでに、いのちの電話の組織の中に一般市民による自殺予防相談と専門性を持つ精神科面接室があったのである。最近になって、自殺対策の基本はメディアカル・モデルとコミュニティー・モデルの二本柱が必要であるとする認識が根づいたが、いのちの電話ではすでに創設時からそうした認識があったことは驚くべきことであ

る。やや大げさであるが、それほどの先駆的な志があったのである。数年を経過した1977年には、わずか5センターだけで日本いのちの電話連盟を結成したが、その後各地に急速に拡大され、センター数だけでも50を越え、全国的に7千人の相談員を擁し、年間の相談件数は約75万件を越えている。さらに各地のセンターで、公的機関・専門機関との幅広い連携を構築するなど、国際的にも高い評価を得ている。

2013年の春、国立精研の自殺予防総合対策センター主催で、自殺対策をめぐるコンソーシアムが開催された。2007年に制定され5年ぶりに見直された「自殺総合対策大綱」を広く周知するための会議であった。実は、最初内閣府参事官による成果報告が会議の冒頭に予定されていた。ところが同センターの配慮で、いのちの電話や日本自殺予防学会が1970年代初めから開拓的な自殺予防活動をしてきたと評価し、国側の報告に先立って小生に民間主導の自殺予防活動について紹介するように求められたのである。これはたいへん名誉なことであり、改めて稲村氏らの開拓的事業に思いを馳せたのである。

この間稲村氏は、当時勤務していた筑波大学のおひざ元で「茨城いのちの電話」創設にかかわり、小生も何度も車で筑波までお手伝いに赴いた。彼が亡くなる前年の1995年に「いのちの電話全国研修茨城大会」が開催さ

れたが、これが彼の最後の大仕事になった。確か主題講演は柳田邦男氏で、小生は初めて来日した著名な精神科医で中国・自殺予防学会会長ザイ・シュ・タオ（濤）博士をお連れしたのを記憶している。

実はこの茨城大会が盛会裏に終了した直後、稲村氏が感極まって号泣したと噂に聞いた。実はその少し前に彼は小生に「余命いくばくもない」と告白し、葬儀の司式まで依頼していたので、彼の思いを察し胸が熱くなったのを覚えている。

一方故平山氏は当初勤務していた自治医科大学助教授を辞し、1993年に地域精神医療を志して足立区に精神科診療所を設置、地域ケアを含むいねいな治療を始めていた。その後自死遺族支援事業に関わったのも、そうした彼の信念にもとづいていた。最晩年には自死遺族への偏見・差別の是正をめざす目的で「自死者の名誉回復宣言」（NPO 法人グリーフケア・サポートプラザ、2009）を公表した。この趣旨は、自殺傾向のある者や自死遺族を裁くのではなく、ケアの対象として認識し、また強く世間の誤解や偏見を糾してい

た。

稲村、平山両氏に共通していたのは、いつもこころ病む人や自殺問題を抱えている人たちの訴えに、さりげなく寄り添って、じっくり傾聴していたことである。そこに自殺を防ぐ秘訣があるように思われる。またこの二人は多くのボランティア相談員に、その生きざまをもって、相談のありかたを教えてくれたように思う。

小生は2012年になって、篤志家の支援を受けて、青少年健康センターの事業の一環として、若年者の自殺予防目的で電話相談「クリニック絆」（03-5319-1760）を創設した。この名称は、稲村博著『心の絆療法』に由来している。開設時には、臨床家から名称が古臭いと揶揄されたり、一方でこれこそ治療の基本だと励まされたりしたが、相談数は徐々に伸びている。実はこの「クリニック絆」は普段は心理相談員が対応しているが、土曜午後には、筑波大学関連の精神科医らが相談を受けるシステムとなっている。いつまでたっても筑波とのご縁は尽きないようである。

（さいとう・ゆきお）

茨城いのちの電話の30年は、
電話を受け続けた相談員によって支えられたことは間違いありません。
そしてその相談員の心を長い間支え続けたのは、
このお二人であったと思います。
お二人の言葉を思い出しつつ、改めて感謝致したいと思います。



故 稲村 博 氏

人生の目標は、
尊敬される人になる
ことではなく
人を尊敬できる人
になること



故 大須賀 発蔵 氏

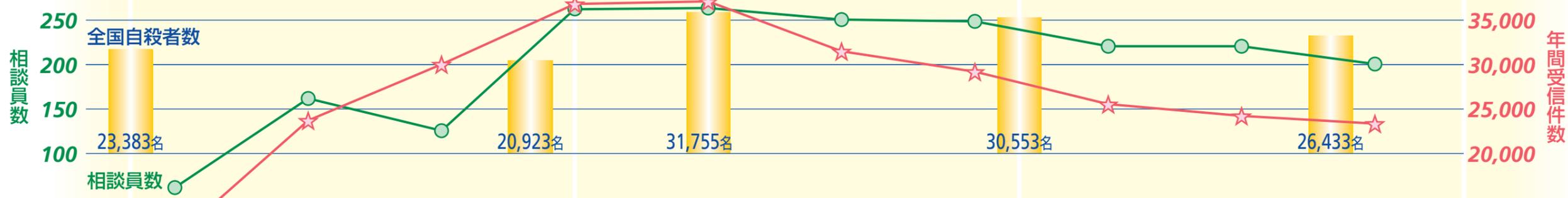
郷音
よちとよち
今あらたに
大須賀 発蔵

茨城いのちの電話の30年

茨城いのちの電話の歩み

1985 1987 1989 1991 1993 1995 1997 1999 2001 2003 2005 2007 2009 2011 2013 2015

- 設立準備会発足
- 「社会福祉法人」認可
- 「茨城いのちの電話」開局
- 8時間受信体制
- 12時間受信体制
- 13時間受信体制へ
- 後援会発足
- 第1期相談員養成講座
- 「社会福祉法人」認可
- 大須賀発蔵氏理事長就任
- 水戸7時間受信体制へ
- 第1期研修スタッフ養成
- 第16回いのちの電話相談員全国研修会茨城大会開催
- 水戸開局
- 24時間受信体制へ
- 水戸7時間受信体制へ
- 茨城県功績団体表彰を受賞
- 茨城県自殺予防シンポジウム茨城大会
- 第32回小平奨励賞（団体の部）受賞
- 理事長に幡谷浩史氏が就任
- ホームページ開設
- 10周年記念講演
- 茨城県自殺予防フリーダイヤル
- 震災フリーダイヤル（2011-2013）
- 6期研修スタッフ養成
- 電話回線デジタル化
- 31期相談員養成講座
- フリーダイヤル「自殺予防いのちの電話」実施



できごと

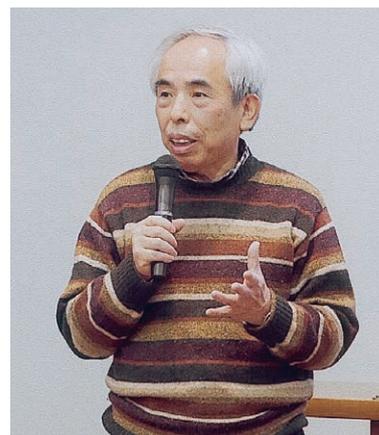
- つくば科学万博
- 平成元年
- バブル経済の崩壊
- サッカーJリーグ開幕
- 毛利衛さん宇宙へ
- 阪神淡路大震災
- 長野オリンピック開催
- イチローメジャーリーグ挑戦
- 小惑星探査機「はやぶさ」打ち上げ
- つくばエクスプレス線開通
- 裁判員制度始まる
- 小惑星探査機「はやぶさ」帰還
- 東日本大震災
- 東京スカイツリー開業

1985 1987 1989 1991 1993 1995 1997 1999 2001 2003 2005 2007 2009 2011 2013 2015

「いのちの電話精神」を深めるために

永原伸彦

茨城いのちの電話 理事
(公財)茨城カウンセリングセンター 副理事長



茨城いのちの電話のこれからの30年を考えるには、ここでもう一度「いのちの電話精神」について考えてみるのが大切だと思います。この「いのちの電話精神」を深め、さらに耕し続けることが、いま一番求められていることだと思うからです。

「いのちの電話精神」は「支えられていると感じる心」

私は「いのちの電話精神」の中心には、この自分自身が「何かに支えられていると感じる心」「誰かに受けとめられていると感じる心」があると思います。この心が育まれていくためには、山あり谷ありの人生体験、様々な苦労や困難、そして時には壁に突き当たって途方に暮れてしまうような人生体験が必要かもしれません。なぜなら、人はそのような時、必死で支えをを求めるからです。また、自分を受けとめてくれるものを強く渴望するからです。これまでの人生経験の中で挫折経験がないという人はいないでしょうから、ある程度は誰にでもおわかりいただけることだと思います。問題は、誰かに、何かに「支えられていると感じる心」が、他者を支える原動力になるという意味でも、非常に重要だということです。

ひとつの例です。2003年3月3日の朝日新聞の「ひととき」という投稿欄に、東京都杉並区在住の40代の女性の投書が掲載されました。投稿者のIさんは、20代の頃、精神的に相当追い詰められ、思い余って「いのちの電話」に救いを求めました。電話を受けてくれた女性相談員は、ひたすら話し続けるIさんの言葉を黙って聴いてくれた後、最後に一言「強いあなたもすてきだけれど、弱いあなたももっとすてきよ」とそう言ってくれ

たそうです。Iさんには、それは初めて聞く言葉のように思われました。そして、こぼれた心とカラダは、その一言に、優しく抱きしめられたようなぬくもりを感じました。投書は次のような言葉で終わっています。「(いのちの電話)の相談員の方、本当にありがとうございました。今でも、あの時のあの声が私の心に響き続け、私を支えてくれています。」

つまり、相談員の応答は20年以上、Iさんを支え続けているということです。問題は相談員の何がIさんを支え続けたかということです。ここに「いのちの電話精神」とは何かを考えるヒントがあると思うのです。この「弱いあなたももっとすてきよ」という言葉の内容だけが伝わったとは思えません。書店の人生論コーナーに行けば、この種の題名の本はたくさんあります。では、何が伝わったのか？

私が思うには、この女性相談員も長年自分の弱い心に悩まされたのではないか？自分の弱さが許せなかった。しかしある時、ふと気づくことがあった。「こんな弱い自分でも生かされているのではないか」「こんな不完全な自分でも、支えてくれている人がいるのではないか」。この時、彼女の中に「支えられていると感じる心」が芽生えています。自分の弱さや不完全さへの「まなざし」が優しくやわらかなものへと変化しています。私たちの中から弱い心を取り去ることはできないでしょう。しかし、その弱さや不完全さも含めた自分自身を受けとめ直し、引き受け直そうとすることはできるのです。こうして芽生えた、深くて柔らかな「まなざし」は、自分自身に対してだけでなく、他者に対しても注がれるようになっていくのです。表面的な言葉の内容よりも、この女性相談

員の「心のまなざし」こそが、Iさんの心を溶かしたのだと、私は思います。そして、このような「心のまなざし」を深めていくことが「いのちの電話精神」を深めていくことでもあるのだと思うのです。

「分かち合う心」の大切さ

それでは、このような「いのちの電話精神」を深めていくにはどのようにしたらよいのでしょうか。研修の在り方としてどうしたらよいのでしょうか。

私は、「分かち合い」のグループ体験が、非常に重要だと思います。茨城いのちの電話でも「出会いの体験」という「分かち合い」のグループ体験が研修の柱として位置づけられています。「分かち合いグループ」の代表的なものと言えば、「自助グループ（セルフヘルプ・グループ）」でしょう。難病友の会など、共通の問題や悩みを抱えた当事者同士の相互支援のグループです。当事者同士ゆえの深い共感性、受容性に支えられた「分かち合い」が生じます。ここで言う「自助グループ」をベースにした「分かち合いグループ」の特徴とその意義をあげると次のようになります。

1. 人はまず、ありのままの自分を受けとめられる体験が大切である。そうすると、人は自分が受けとめられたように、相手を受けとめようとするようになる。この相互受容性を最重要視した「分かち合い」のグループである。
2. 人は、問題を解決して生きていくという生き方だけでなく、問題と共に、問題のあるこの私を丸ごと引き受けていこうとする生き方もある。このような人間観に基づいた「分かち合い」のグループである。
3. この「分かち合い」のグループ体験は、例えば「いのちの電話」の相談員や養成講座生という当事者同士の支え合い生み、対等性をベースにした「心のつながり」の持つ、安心感、開放感というものをメンバーたちが体感していく。そのような体験を目指す「分かち合い」のグループである。

さて、茨城いのちの電話の「出会いの体験」の場合、自助グループをベースにした「分かち合いグループ」ですが、そこにメンバーだけでなく

サポーター（ファシリテーター）という人が入ります。相互受容性を尊重したり、メンバー間のコミュニケーションをサポートしたりします。このサポーターは、ファシリテーター体験の豊富な研修担当者と内部の相談員でもある「研修スタッフ」とが組んで行います。最初はメンバー間で様々な話が展開しますが、やがて、場つなぎ的発言や話題提供的発言が少なくなしていきます。そして、相談員になることへの不安や、個人的な課題や悩みなどが語られます。グループという場に安心してくるからです。そこで、ありのままの自分が受容されていくことの「安心と喜び」が体験され、周りのメンバーの気持ちを受けとめたいという「心の姿勢」が生まれてきたりします。メンバー同士の間にも、お互いに「支えられていると感じる心」が芽生えてくることが多いのです。また、相談員になってからも続く「継続研修グループ」も、この相互受容性をベースにしたグループです。その土台の上に、必要な知識や技法の学習、相談員としての振り返りなどが行われます。

このようにして、その弱さや不完全さも含めた自分自身を受けとめ直し、引き受け直そうとすることによって、自分自身や他者への深くて柔らかな「まなざし」を育もうとする「いのちの電話精神」は、電話相談活動・相談員研修をはじめとするすべての「いのちの電話」の活動を根底から深く支え続けているのです。

終わりに、この「いのちの電話精神」を語る上で、忘れられない二人の人のことを思います。一人目は、稲村博先生です。茨城いのちの電話の生みの親のひとりであり、長く筑波大学の社会医学系で教鞭をとられました。心血を注いで「いのちの電話精神」の大切さを語った人です。二人目は、茨城いのちの電話の初代理事長の大須賀発蔵先生です。大須賀さんは、いつもボランティアの人々をねぎらい、愛し、尊敬していました。二人とも故人となられましたが、今も私たち「茨城いのちの電話」に関係するすべての人を支え、見守ってくださっています。私はそれを確信しています。



後援会 ～後援会員をたずねて～

茨城いのちの電話の30年は、電話相談そのものを担う相談員と、それを支える後援会員が両輪となって歩んできました。後援会員の皆様は、単に資金面のみならずさまざまな形でサポートして下さっております。このページではそんな後援会員様を紹介させていただきます。たくさんの方を、限られた紙面ではとても紹介しきれませんが、今後とも定期的にご紹介させていただく予定であります。

茨城トヨタ自動車株式会社様

茨城トヨタ自動車株式会社様は、たくさんの関連企業を抱えた県内有数のグループ企業ですが、そのさまざまな業種の皆様にそれぞれの分野でのサポートをいただいています。近年、事務作業におけるIT化は避けて通ることができない事柄ですが、茨城いのちの電話の主要な管理システム、集計システムは関連企業(株)タックス様によるものです。IT素人のいのちの電話事務局にあって、(株)タックス様はある意味神様なのです。

活動資金集めの為のバザーは、年に数回、場所を変えて行っております。バザー用の献品は常時受け付けておりますし、更に開催場所がその都度変わりますので、バザーに向けた献品類の保管と、会場までの運搬は常時の仕事になります。茨城トヨタ自動車株式会社様には、この保管と、運搬を一手に引き受けていただいています。このほか人的にも、専門性を必要とする場面で組織の運営で重要なサポートをいただいています。グループ企業ならではの強みで、いろいろな場面で発揮いただけるプロフェッショナルは今や茨城いのちの電話の運営には欠かすことのできない存在です。



バザーでは毎年、大きな収益をあげています

株式会社カスミ様

茨城いのちの電話開局当初から、長い時間にわたって後援会員としてサポートくださっています。資金面での援助に留まらず、理事/評議員などとしていのちの電話の運営にも参加いただき、ともすれば固くなりがちな組織の運営に活気と柔軟さを加えていただいております。いのちの電話の活動の中心は電話相談に他なりません、その活動維持の為に、一年間に延べ250回前後のさまざまな研修会を行っております。研修の内容もさまざまですが、その参加の人数も10数名から数百人まで多岐にわたります。それぞれの研修会の事情に応じた会場の確保は研修担当の大きな仕事の一つですが、カスミ様はここでも頼もしい存在です。公民館・コミュニティセンターなどの公的な施設の継続的な使用がますます難しくなる中で、長きにわたりカスミ様の研修室をお借りできている状況は、茨城いのちの電話にとって、とても重要で感謝に堪えない事柄なのです。

ご自身の会社が長い時間に渡って、このような社会福祉活動に関わってきた事について人事総務本部マネジャー・生井義雄様は、「当社は、事業とともに社会活動や環境活動を通じて、真に『お客さまのために』お役に立てる企業づくりこそ使命と考えています。いのちの電話のサポートも、地域に根ざした活動の一つとして、少しでも地域の皆様のお役に立てれば幸いです。」とおっしゃっています。



株式会社茨城木材相互市場 様

水戸地区で現在も続いている「茨城木材相互市場バザー」の始まりは、1989年11月のことでした。設立間もない「茨城いのちの電話」にとって、活動資金を確保することは喫緊の課題でした。会費や寄付をお願いする以外にも何かできないかと、単発で、デパートの一角をお借りしてバザーをやったこともありました。

そんな折、当時「茨城木材相互市場」の代表をしておられた大須賀発蔵先生から「会社のイベントには大勢人が集まるので、そこで品物を売ってみては？」と声をかけていただいたのです。以来25年、「茨城木材相互市場」全面協力のもとバザーの回数は31回になりました（年1回×19+年2回×6）。社員の方が、銘木フェアの準備に忙しい中、バザー品の上げ下ろしを木材用のクレーンで手伝ってくださった事など感動的に思い出されます。

こうして毎年同じ場所でバザーをやることによって、地域の皆様の認知度も上がり、来て下さる方々も増えました。又、社員の方々とも、お顔なじみになり、年1回の再会はうれしいものとなっています。

25年の間には、社会情勢も大きく変化しました。その中で、「茨城木材相互市場」と「茨城いのちの電話」の繋がりが、絶える事なく今日まで続いてこられたのは、ひとえに「茨城木材相互市場」の中に引き継がれてきた経営理念によるところが大きいことを強く感じながら、そのご厚意に深く感謝いたします。



水戸ロータリークラブ 様

茨城県で最も早く創設された水戸ロータリークラブ様は、1951年創設以来、65年間にわたりさまざまな奉仕活動をされています。県内58クラブの親とも言える立場としても、重要な役割をはたされています。茨城いのちの電話とのかかわりは、1985年の年末募金に始まります。そのきっかけは、水戸西ロータリークラブのメンバーでもあった、当時のいのちの電話理事長・大須賀発蔵氏からの紹介であったようです。以来、後援会員として30年の長きにわたりご支援をいただいております。

今回の記事掲載にあたり、豊崎繁会長に代わり2014～2015年度幹事・内藤学様にお話を伺うことができました。いのちの電話と同様に奉仕活動を旨とする組織が、高いレベルで活動を継続できている事について、『頑張りすぎない程度に頑張る事』と秘訣をおっしゃる内藤様は、一年間の幹事のお仕事に全力投球されているように感じました。65年間の活動は、変化と継続の絶妙なバランスの上に立っています。小さな流れの確実な継続と大きな流れの中にある変化、これらの組み合わせこそが私達いのちの電話が学ばせていただくことなのかと考えます。

かつての茨城いのちの電話の理事長・大須賀発蔵氏は、ロータリークラブで青少年の育成に力を注いだと言います。内藤様はこの青少年との交流もまたクラブメンバーにとって重要なのではないかとおっしゃいます。80歳代のメンバーとの仕事、更に10代との交流、この幅の広さもまたクラブの強さなのだと思います。

過去、メンバーには女性がいらっしゃらなかったとか。恐らく近い将来ここにも変化がやってくるのだと思います。その変化をどのように吸収され、どのように発展させるのか、またいつか、お話を伺いたく思いました。



水戸ロータリークラブ
幹事 内藤 学様

29期生認定式



去る3月28日(土)第29期生の認定証授与式が行なわれ、22名の新しい仲間が茨城いのちの電話に加わりました。幡谷理事長から一人一人に対し、認定証が授与された後、ご来賓の方々や先輩の相談員が見守る中誓約が行なわれ、29期生の皆さんが電話相談員としての第一歩を踏み出しました。引き続き、「絵描きのように 作家のように」との演題で茨城キリスト教大学鈴木研二先生による記念講演が行なわれ、その中で、鈴木先生はご自身のご病気の体験も交えながら、私たちは自分がカウンセラーだと思った時から、カウンセラーではあるが、更にステップアップを目指すには、人を見る目を磨くこと、コーラーとの暖かいつながりを紡ぎ出すため、普通のおじさん、おばさんでありつつづけること、しかし、そのためには、更なる勉強と修行が必要だと話されました。

毎年恒例の手作り祝賀会は今年20期から23期生の有志が中心になって計画され、29期生のスピーチから始まり、研修に携わった方々の挨拶や励ましのことが述べられ、簡素な中にも和やかで、暖かさがあふれる会でした。最後は参加者全員が輪になり、バンザイ三唱で会を閉じました。(K.M)



開局30周年記念 新垣 勉 チャリティコンサート

2015年10月3日(土)
13:00開場・13:30開演
小美玉市四季文化館
みの〜れ・森のホール

全席自由
前売券 2,500円
当日券 2,800円
チケット発売日
6月6日(土)



申込み先 (電話またはFAX/受付先着順)

- 茨城いのちの電話事務局
つくば TEL 029-852-8505
FAX 029-852-8355
水戸 TEL 029-244-4722
FAX 029-350-1055
- 小美玉市四季文化館みの〜れ

受信状況

1985年6月1日～2015年3月末現在

総受信件数

844,673件

うち当期受信件数

(2014年10月1日～2015年3月末現在)

11,818件

男 5,586件 女 6,232件

30周年にあたり総受信件数を再確認しましたところ、前号までの表記に誤りがありました。今号にて訂正させていただきますと共に、お詫び申し上げます。

〈編集後記〉

この一年間で、さまざまな方から「これからの30年」についてお寄せ頂きました。それぞれの方から、重い課題と一緒に明確な処方箋を頂いたようで、とても元気にもなりました。変化する事の難しさは身にしていますが、自分自身の『今日の0.1mm』の変化こそ、明日の何かに向かう一歩なのだと思ひます。これからの活動の一つのバイブルとしてこの一年の機関紙を残せた事に、ご寄稿頂いた先生方へはもちろん、尽力してくれた編集メンバーに改めて感謝致します。

社会福祉法人
茨城いのちの電話

発行人 幡谷 浩史 編集 茨城いのちの電話広報委員会
事務局 〒305-8691 茨城県筑波学園郵便局私書箱60号 TEL **029-852-8505**
ホームページ <http://www.iid.or.jp> FAX **029-852-8355**

再生紙を使用しています

この広報紙は、共同募金からの配分金で作りました。

